

日本を刷新した十日間

発券局OBの追想に見る「新円切り替え」

終戦直後、国富の四分の一を失ったわが国は猛烈なインフレーションに見舞われ、昭和二十一年（一九四六）年二月十六日、政府はついに「金融緊急措置令」と「日本銀行券預入令」を柱とする総合インフレ対策を発表、わが国金融史上例のない緊急かつ直接的な非常措置に踏み切った。「新円切り替え」である。

ところが、戦災の影響などもあり大量の新円の製造が間に合わない。しかも、新旧銀行券の引き換え期間は二月二十五日からわずか十日間。それは日銀にとって、銀行券の改刷（様式の一新）を伴う文字どおり「刷新」とも言うべき大事業であった。

取材・文 清水たくや



昭和二十一年という年は、前年八月十五日に敗戦を迎え

たばかりのわが国にとって、実に多事多端であった。GHQ（連合国軍総司令部）の主導のもと、政治経済をはじめとするあらゆる分野において、改革を旗印に掲げた占領政策が急ピッチで推し進められていた。

その一方で、巨額の臨時軍事費や終戦処理費の支払いに起因するインフレーションが激しさを増

し、物資不足とも相まって物価は恐ろしく高騰。それだけでなく食糧難にあえいでいる国民生活の窮乏に追い討ちをかけた。何らかの思い切った措置を講じないと、日本経済を復興どころか崩壊に導く危険さえあった。

政府が二月十六日に「金融緊急措置令」と「日本銀行券預入令」を柱とする総合インフレ対策（「経済危機緊急対策」）を発表したのは、そうした状況下だった。そして、全国的にすべての預貯金などを封鎖し、旧銀行券（旧券）を新銀行券（新円）に引き換える「新円切り替え」の実施に踏み切る。それが尋常な対策ではない非常措置であることは、ラジオ放送で政策を発表した渋沢敬三大蔵大臣の話からも伺えた。

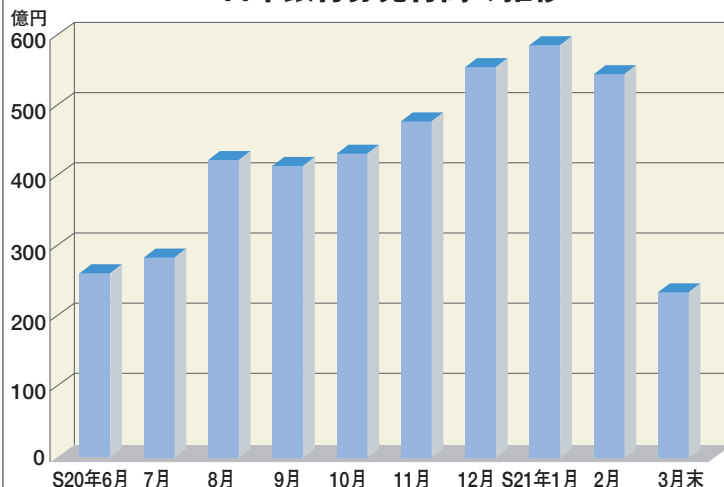
「皆サン、唯今、総理大臣がオ話しニナラレマシタ通り、政府ハ、ナミナミナラヌ決意ヲ以テ、敗戦日本ヲ建テ直ス為ニ、各方面ニ亘ツテ、ホントウニ思イ切ツタ、シカモ、総合的ナ一連ノ緊急対策ヲ、断乎トシテ、実施スルコトニ決意シタノデアリマス」（大蔵省財政史室編『昭和財政史』第二二巻）

*（注）……文中の敬称は省略しました。また、役職名などはすべて当時のものです。



政府発表の「金融緊急措置令」と「日本銀行券預入令」を伝える当時の新聞記事。

日本銀行券発行高の推移



データ：日本銀行統計局『本邦経済統計』昭和21年12月、23年3月



終戦後、膨張の一途をたどっていた日銀券発行高は、金融非常措置が功を奏し、3月末には著しく収縮した(上)。ドイツでは、第1次大戦後の猛烈なインフレで、100兆マルク紙幣まで発行された(貨幣博物館所蔵)(左)。

また、金融緊急措置を実施する
中核機関である日銀からも、新木
栄吉総裁の次のような談話が発表
された。

「日本銀行としてはこの際全力を
振って任務を遂行する覚悟であ
る。(中略) 私は茲に全国の金融
界、事業界及び国民全般が現下の
国家危急に際し救国の至情を以て
今回の措置に対して相互に協力し
援助し合い我国経済再建の大事業
に邁進せられん事を希望する次第
である」(日本銀行百年史編纂委
員会編『日本銀行百年史』第五卷)
円切り替えというものは、具
体的には、全国一斉に実施
される次の①②③のような一連の
通貨措置のことを指す。

すなわち、①二月十七日以降、
全金融機関の預貯金を封鎖する。
②流通している十円以上の銀行券
(旧券)を三月二日限りで無効と
する。③三月七日までに旧券を強
制的に預入させ、既存の預金とと
もに封鎖する一方、新様式の銀行
券(新円)を二月二十五日から発
行し、一定限度内に限って旧券と
の引き換えおよび新円による引き
出しを認める。

わが国の金融史上、ひいては日
本銀行史上、これまでに例のない
緊急かつ直接的な経済対策だっ
た。しかも、旧券と新円の引き換
え期間は、旧券の預入と新円の支
払いが開始される二月二十五日か
ら、旧券預入最終日である三月七
日までの十日間あまり。

「これまでの歴史に例のない非常
措置を円滑に実施するため、その
準備作業を短期間、極秘裏のうち
にすすめ、わずか一〇日ほどの間
に新旧銀行券の引換え作業を行わ
なければならなかった。金融緊急
措置の実施に当たる中核機関とし
て本行が、多くの困難に直面させ
られたことは容易に想像できよ
う」(前出『日本銀行百年史』)

そのうえ、総合インフレ対策の
実施時期が想定よりも約半年繰り
上げられたことが、困難に拍車を
かけていた。極秘裏に準備してい
たとはいえ、新円の製造を二月二
十五日の引き換え開始に間に合わ
せるのは、時間的にも量的にも不
可能だったのだ。

そこで考え出されたのが、「証
紙貼付銀行券」。証紙を発行し、
これを旧券の表面に貼って臨時的



発券局OB（昭和19年1月入行）の松本光世氏。

に新円と見なすというものだ。いわば、新円切り替えという大事業は、証紙を一枚一枚手作業で旧券に貼っていくという、にわかには信じがたいような準備作業に支えられていたのである。

発

券局OBの松本光世も、証紙貼りを経験した一人で、ある日いきなり上司から、「証紙を貼って、全部改刷する」と言われて、「え？」と驚いた。

昭和十九年一月に「女子挺身隊」の一員として女学校を仮卒業して入行後、発券一筋で職を全うし、改刷も四度経験した。だが、「あのときの苦労だけは、ちょっと比べようがない」といってほど鮮烈な思い出となっている。

「証紙貼りを開始した日付までは覚えていないのですが、とにかく

大変でした。証紙一〇〇枚分が一枚に印刷されているのですが、裏にノリなんてついていないし、証紙と証紙の間にミシン目どころか線も引いてない。それをハサミで切っては、白いノリで旧券に貼っていくわけです。小さくて薄いし、切るのに失敗したら大変ですから、ものすごく緊張しました。一度に一〇〇枚全部切って、あとで数が合わなくなるのがイヤで、私は一〇枚ずつ切っていましたね」

ノリもあまり上等ではなく、少量ではすぐに証紙がはがれてしまう。かといって、たくさんつけるとノリが証紙からはみ出して、紙幣を重ねたときに上とくっついてしまう。紙幣の右肩に貼る決まりだから、束ねるとそこだけが盛り上がり、枚数確認もひと苦労。

「だからもう、全然能率が上がらなくて。私なんかまだ女学生気分抜け切らないペイペイで、全体のことなんて何も知らないに等しくて、ひたすら黙々と証紙を貼っていく毎日でしたけど、こんなことやってて間に合うのかしらって思いましたもの（笑）」

証紙の貼り付け作業は、発券局

だけでは手が足りず、調査局を含む日本銀行各部署の全職員が、日曜出勤までして手伝った。それだけではなく、各地の市中金融機関でも夜を徹して行われた。

こうして、日銀を筆頭とする全金融機関の一丸となった取り組みが功を奏し、準備万端整って、全国一斉に新円切り替えを実施できた。新様式券（A系列券）の発行も順調に進み、引き換え業務も、多少の混乱はあったものの短期間のうちに予定どおり終了した。

ただ、総合インフレ対策の非常措置としての効果は一時的なものにとどまり、日銀券の発行高は再び上昇を始めた。悪性化するインフレの中で、非合法な闇市でひと財産築く人も珍しくなかった。

新円切り替えの翌年に、松本もいまだに忘れられない光景を目撃する。小麦粉や油などが一般庶民には高嶺の花の時代、自宅近くに若い兄弟が経営する精進揚げ（野菜の揚げ物）の店ができたとき、見物に出かけた。すると、店の奥に見える部屋の障子が全部、いろんな券種の旧券だったのだ。

「ショックでした。私はもう精進



右肩に証紙の貼られた証紙貼付銀行券（百円券）と4種類（千円、二百円、百円、十円）の証紙。証紙はいずれも唐草模様をあしらった簡単なもので、大きさは縦27mm×横18mm程度。証紙貼付銀行券は昭和21年10月末まで流通した（貨幣博物館所蔵）。

揚げどころではなくなって、障子ばかり見てました。苦労して扱ってきたお札でしたから、余計にそう感じたんでしょうね」

紙も不足していたとはいえず、なぜ旧券を障子紙にしたのか、今となっては知る術もない。終戦直後の世相の一断面といえようか。

日本経済を苦しめ続けたインフレは、昭和二十四年にGHQによるドッジ・ラインの実施でようやく



終戦後、あらゆる生活必需品が欠乏し、焼け跡の広場や駅前周辺には闇市が次々に出現した（右）。新円切り替えにより、旧券を新円（新券）と引き換える市民（左）。一定限度内に限って払い戻しが認められた（写真はいずれも毎日新聞社提供）。

く終息する。だが、新円切り替えについては、さらに後日談が続く。A系列券の十円券について、風説を真に受けたある国会議員の談話を「十円札に『国辱的図案』の声」と新聞が報じ、衆院大蔵委員会でも取り上げられるほどの大騒ぎになったのだ。昭和二十八年七月下旬のことである。

A系列の十円券は、確かに発行に際してGHQから図柄の修正を求められるなど、波乱含みのデビューではあった。

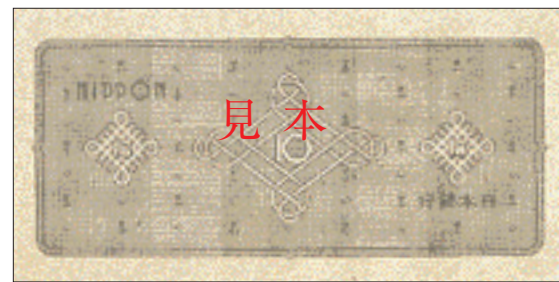
しかし、風説はすべて憶測にすぎず、騒ぎのあった年の「文藝春秋」十一月号の巻頭随筆で、図案の話に触れて、「実際に知って居るものから見ると、悉くこじつけであつて、あの当時の図案作成者や印刷関係の人々にとつては嚙かし心外な、腹立たしいことであつたろうと察せられる」と書いた人物がいた。新円切り替えのときに発券局長として陣頭指揮に当たった元日銀理事の白根清香（当時、日本証券金融社長）である。

この文章が図案の原案作者であった水彩画家の相沢光朗の目にとまり、一面識もなかった二人の間

に交流が生まれて、後年二人はテレビにも出演する。三國一朗が司会を務める東京12チャンネル（現テレビ東京）のシリーズ番組「私の昭和史」（収録内容は全六巻で出版されたのち文庫化）。二人が出演したときのテーマは「新円切り替えのころ」であった。

当事者のみが知りうる証言によって、新円切り替えの経緯やA十円券の図案の真相などが明かされ、番組の最後に、白根は三國から新円切り替えについての当事者としての感想を請われ、こう語った。

「あの短い期間に、あれだけのことをよくやれたと、技術的にはよ



新円切り替えに伴う改刷で、昭和21年3月に登場した戦後初の日本銀行券（A系列券）のA十円券（上が表面、下が裏面）。A系列券には、このほかにA百円券、A五円券、A一円券などがあり、発行開始はA百円券とA十円券が3月1日、A五円券が8日、A一円券が20日。製造・発行にはGHQの事前承認が必要で、五円券以外で図柄の変更を求められ、修正を施したうえで、ようやく発行開始となった。

くやれたと思います。（中略）当時としては、ほんとうに秘密裏ですからね。全国津々浦々、離島の小笠原、礼文島あたりまで、期日までに極秘裏に送っておかきやあならんということ、ほかに知られん苦心があったと思います」（『証言・私の昭和史⑥ 混乱から成長へ』文春文庫）

放送は昭和四十一年一月十七日。狙い澄ましたようにこの日に放送できたのは、番組編成上の妙味といえるかもしれない。それからさらに四十年が過ぎ、貴重な証言の数々は、「戦後」という歴史の中で、ますます輝きを増している。